

■ 心中天の網島詳解 ■

伊藤正雄 著

神宮皇學館
教授 文學士

伊藤 正雄 著

心中天の綱島詳解

東京 富山 房 版

伊藤正雄

明治35(一九〇二)年大阪市生れ。
昭和2(一九二七)年東京帝国大学
文学部国文科卒業。3121年
神宮皇学館教授。その後旧制
甲南高等学校教授を経て、甲
南大学教授、同名誉教授、神
戸女子大学教授を歴任。53
(一九〇八)年歿。主な著書に、『小
林一茶』(三省堂)、『福沢諭吉
論考』(吉川弘文館)、『俳諧七
部集芭蕉連句全解』(河出書房
新社)、『文章のすすめ』(春秋
社)、『引かれ者の小唄』(春秋
社)他があり、本書はその処
女著作に当る。

心中天の網島詳解

一九三五年五月十七日 発行
一九九一年六月二十四日 新装第一刷発行

著者 伊藤 正雄
いとう まさお

発行者 坂本 起一
さかもと けいち

印刷 内外印刷 (株)

製本 加藤製本 (株)

〒一〇二〇 千代田区神田神保町一丁目二番地
発行所 合資会社 富山房

電話 (三三)三三九、一七、七
振替 東京五〇五四九二九

©Printed in Japan, 1991.

(落丁・乱丁本はおとりかえいたします)

ISBN 4-572-00771-3

は し が き

本書は近松門左衛門の傑作「心中天の網島」を、なるべく詳しく且平易に解釋せんと試みたものである。言ふまでもなく近松の淨瑠璃、殊に世話物は、日本文學の最高峰の一つで、近年是に對する學者の研究は益々盛となり、専門程度以上の文科方面の諸學校では、近松物の講義のない所は殆どないと言つてよい位である。然るに其註釋書に至つては、未だ適當なるものが甚だ乏しく、私自身の經驗から言つても、研究や教授に屢々不便を感じてゐるので、敢へて自ら微力を願みず、其註釋に志し、こゝに其一部として「心中天の網島詳解」を世に送る事になつたのである。第一に「天の網島」を擇んだのは、此曲が近松晩年の最も圓熟した時代を代表する傑作であり、彼が世話物中の極致と見るべき作品であるから、まづ本曲一篇を究める事が、他の何れの曲を採るよりも、一層近松の藝術の神髓に觸れ得ると確信するが故に外ならない。

本書は、「天の網島詳解」を中心にして、其前に「總說」を附し、終りに附録として

「近松参考書目録」を添へた。「總説」中には「天の網島」の解題のほかに、特に、近松時代の大坂の遊里、當時の貨幣制度、及び時刻法に就て略説を試みた。これらは單に「天の網島」のみならず、近松や西鶴等のあらゆる作品を讀むに當つて、常に心得置くべき知識であるからである。殊に江戸時代の貨幣制度は、今日と頗る趣を異にし、甚だ複雑で、當時の文學を解釋せんとする者にとつて、一の難關であるが、之に就て今迄判り易く解説したものが見當らないので、こゝに「元祿文學研究の爲の貨幣制度の知識」と言ふ標準で、これが簡單なる叙述を試みた次第で、一般讀者にとつて多少參考になる事と信ずる。又附録の「近松参考書目録」は、自分の備忘録を整理したもので、甚だ不完全なる事を恥入るのであるが、この程度の近松文献目録さへ從來公にされてゐない様に思はれるので、之亦讀者の便宜を思うて敢へて附載した。他日完全なる目録が、篤學の士によつて作製されん事を祈つてやまない。

本書の中心部をなす「心中天の網島詳解」の組織は、「天の網島」の本文を適當なる段落に句切り、各段毎に、「要旨」「註釋」「口譯」「後評」の四項を設けて説明した。「要

旨」は其段の大意、「註釋」は各語句の細註、「口譯」は全文の現代語譯、「後評」は構想や修辭の批評、作者の創作心理の闡明等をはじめ、其他讀者の理解を深め、鑑賞に資すべきさまじくな事柄を記したものである。而して各項に互り、著者の用意としては、本曲一篇を通じて、近松曲全般の特徴を解明する様に心がけたつもりである。又「註釋」の項に於て、特に近松時代の時代語、流行語等に就ては、當面の文章の解釋に必要な以上に、やゝ煩はしい詮議に立入つた所があるが、これはまだ學界における近世語の研究が十分でなく、完全なる近世語辭典も出來てゐない現状にあつては、かやうな機會にそれらの語句をなるべく詳細に究明して置く事が、徒爾でないと思つたからである。但しこれら細說に互る部分、即ち語原の穿鑿、出典の舉示、用例の引證、異說の考究等は、概ね○印を附して、普通の説明のあとに廻して置いたから、たゞ一通りの意義だけを求めらるゝ讀者は、○印以下を省略されてもよい。次に「口譯」は、力めて原文の意味の徹底を期する爲に、必ずしも嚴格なる逐語譯には依らなかつた。就中道行其他の韻文がかつた所は、逐語譯では到底通じ難いから、かなり大膽に言葉

を補つたり、言葉の順序を故らに變更したりして、自由譯をしてある。

本書は近松の作品乃至近世文學に習熟せざる讀者にも、隔靴搔痒の感なからしめん事を慮つた結果、一面素養ある讀者に對しては、不必要な説明も少くないが、之は偏へに御寛恕を仰ぎ度い。現在の老人達や専門學者には自明の事柄も、將來の若い一般の讀者には、益、難解な古典的知識となつて行く事が多からうと思つて、總説に於ても、本文の註解や批評に於ても、常に初步の讀者を念頭に置いて、其手引たらん事を期したのである。又私は東京で大部分育つた者であるが、郷里は大阪であり、且京都にも暫く在住した事があるので、元祿文學に現れる京阪の地名、風俗、言語等にして、現在も其儘其地に残つてゐるものは、比較的了解に苦しむ事が少いけれども、全然京阪に縁のない人にはそれらの事柄も説明なしには通じ兼ねる場合のある事を經驗してゐるので、その點も考慮して筆を執つた。其爲に愈、冗漫に流れたふしのある事は、御諒恕を冀ひ度いと思ふ。

本書に掲げた「天の網島」の本文は、正本の假名の部分を漢字に改め、假名遣ひを

正し、適當なる句讀點を施して、すべて讀み易きを本位とした。節付の符標を、二三説明に必要なもの以外、すべて省略したのは、たとひ之を正本通り保存しても、之に音樂上の説明を加へなければ意義のない事であるし、さればとて之を悉く音樂的に説明する事は、門外漢の自分の到底能くする所ではないからである。近松の作品が人形劇の臺本である以上、之が音樂的研究も重要な一面をなす事言ふ迄もないが、少くとも文學の側から扱ふ限りに於ては、節付の吟味は姑く除外して置いてよいと思ふ。

此註釋をなすに當つて、直接最も恩惠を蒙つたのは、故佐々政一博士の「近松評釋天の

網島」及び上田萬年博士樋口慶千代氏共著の「近松語彙」である。前者は既に三十餘年前に著されたものであるから、今日から見れば不備な點の多い事は止むを得ないし、後者に對しても私として異を樹てた所が必ずしも少くないが、ともかく此兩書によつて裨益された事は甚大であつた。其他水谷不倒氏の「近松傑作全集」の頭註、藤井乙男博士の「近松全集」の頭註、故黒木勘藏氏の改造文庫の「天の網島」の註、佐藤鶴吉氏の「元祿文學辭典」、木谷蓬吟氏の「大近松全集註釋辭典」等、それ〴〵参照して

益を受けた。「和漢三才圖會」「俚言集覽」「嬉遊笑覽」「守貞漫稿」等々、江戸時代の書物は一々列挙するまでもない。なほ「總説」の執筆に當つては、殊に高野辰之博士の「近松時代の大阪の遊里及び遊女」(歌舞音曲考説及び日本演劇の研究一所載)や草間直方の「三貨圖彙」等を屢々參酌して、お蔭を蒙つた所が多い。是等古今の先輩の學恩に深く感謝の意を表すると共に、此小著に對する江湖の高教を仰ぎ、併せて將來の御鞭撻を冀つてやまない。

終りに臨んで、本書の出版に多大の御力添へを賜はつた上田萬年先生に、厚く御禮を申上げる次第である。

昭和十年三月

伊 藤 正 雄

目次

總説

一、心中天の網島解題

- 成立……一 梗概……二 特色……四 改作……五 本曲成立に關する逸話……一〇 大長寺のこと……三

二、近松時代の大坂の遊里

- 近松物に現れた大坂の遊里……三 新町……一五 島の内……二七 伏見坂町……一九 北の新地(堂島新地と曾根崎新地)……一九 其他の遊里……二三

三、近松時代の貨幣

- 幣制の確立……二五 三貨……二六 三貨の單位……二七 計數貨幣と秤量貨幣……二八 金本位と銀本位……二九 三貨の種類……二九 各貨幣の形狀……三〇 各貨幣の異名……三三 三貨の

比價……………	三	現代の貨幣價值との比較……………	四	慶長金銀と寛永通寶……………	五	元祿の惡貨鑄造……………	六
……………	三	寶永正徳の惡貨鑄造……………	六	正徳金銀(享保金銀)の鑄造による古制回復……………	四	各	
種金銀の割合使の法……………	四	元文以後の改鑄……………	六	大判の性質……………	七	錢何疋と言ふ事……………	八

四、徳川時代の時刻法……………四九

數字による法と十二支による法……………	九	時の鐘……………	五	十二支による法の二つの解釋……………	五
一時の細分法……………	五	晝の一時と夜の一時との長さの相異……………	五	現代語に残れる昔の時刻語……………	五

心中天の網島詳解……………五四

上之卷 (河庄の場)

(一) さん上ばつからふんごろのつころ云々(幕開きの情景)……………	五
(二) 橋の名さへも梅櫻、花を揃へし其の中に(小春の登場)……………	七

(三)	オ、／＼そんならちやつと外さんせ（なまいだ坊主）……………	八四
(四)	人立紛れにちよこちよこ走り、とつ河内屋に駈込めば（身すがら太兵衛の登場）……………	九
(五)	エ何おしやんす。今宵のお客はお侍衆（侍客の登場。太兵衛の退却）……………	二三
(六)	所がら馬鹿者に構はず堪へる武士の客（小春と侍客との對面）……………	二四
(七)	天満に年ふる千早振る、神にはあらぬ紙様と（治兵衛の登場）……………	四三
(八)	奥の客が大欠伸。思ひのある女郎衆のお伽で氣がめいる（侍客の忠告。小春の變心）……………	五〇
(九)	そとにははつと聞き驚く、思ひがけなき男心（治兵衛の刃傷）……………	六二
(一〇)	ぞめき戻りの身すがら太兵衛（太兵衛の再登場及退却）……………	七〇
(二)	人立すけば、侍立寄つて縛り目解き（侍客實は兄孫右衛門）……………	七五
(三)	大地を叩いて治兵衛、誤つた／＼。兄ぢや人（治兵衛の悔悟）……………	八八

中之卷（紙治内の場）

(三)	福德に、天満つ神の名を直に（幕開きの情景）……………	一九
-----	----------------------------	----

(四)	ヤ阿房にかゝつて忘りよとした(叔母と孫右衛門の登場).....	二二
(五)	治兵衛手を打ち、ハア、よめたく(叔母と孫右衛門の退場).....	二七
(六)	門送りさへそこくに、閨も越すや越さぬ中(おさんの恨み泣き).....	三七
(七)	治兵衛眼押拭ひ(おさんの告白).....	四三
(八)	それとても何とせん。半金も手付を打ち(小春身請の算段).....	五四
(九)	私や子供は何着いでも、男は世間が大事(おさんの貞實).....	六八
(一〇)	三五郎爰へと、風呂敷包肩に負はせて供に連れ(舅五左衛門の登場).....	七三
(一一)	夫婦はあつと顔見合せ、呆れて詞もなかりしが(五左衛門の赫怒).....	八〇
(一二)	此の風呂敷も氣遣ひと、引解き取散らし(おさんの離縁).....	八六
下 之 卷 (大和屋の場及道行心中)		
(一三)	戀なさけ、爰を瀬にせん蜷川(大和屋幕開きの情景).....	九七
(一四)	茶屋の茶釜も夜一時、休むは八つと七つとの(治兵衛が心中の計畫).....	一〇六

(五)	治兵衛はつたと往ぬる顔、又引返す忍び足（孫右衛門の登場及退場）	三二七
(六)	影隔たれば駈出でて、跡なつかしげに仲上り（小春の脱出）	三四四
(七)	走り書、謠の本は近衛流、野郎帽子は若紫（道行）	三三二
(八)	なういつ迄うか／＼歩みても、爰ぞ人の死場とて定まりし所もなし（心中場の一）	三五九
(九)	憂世を遁れし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔（心中場の二）	三六七
(一〇)	後に響く大長寺の鐘の聲（心中場の三。兩人の絶命）	三七八

附 録 近松参考書目録……………三九〇

一、	近松作品集……………	三九二
二、	近松註釋書……………	三九五
三、	近松辭書……………	四〇〇
四、	一般淨瑠璃史……………	四〇一
五、	近松の傳記評論書……………	四〇七

六、諸書に見えたる近松關係の記事……………	四三
七、雜誌講座類に見えたる近松關係の記事……………	四四

索引……………	一
---------	---

挿畫目次

口繪

- 一、人形芝居の河庄
- 二、人形芝居の紙治内
- 三、歌舞伎の河庄
- 四、歌舞伎の道行

本文挿畫

新町の地圖……………一五

島の内之地圖……………	一八
炮碌頭巾……………	九
熊野の牛王……………	三二
丸に蔦の葉の紋……………	三三
短檠……………	三八
野郎帽子……………	三八
投島田……………	三三
樋の俎木……………	三七〇
卷末地圖	
心中天の網島關係地名圖	

一、心中天の網島解題

成立

「心中天の網島」は享保五年（一七二〇）十二月六日初日で竹本座に上演された淨瑠璃である。時に作者近松は六十八歳で、彼は享保九年七十二歳で歿したから、本曲は其歿する四年前の作である。彼の生涯ものした世話物は總計二十四篇で、「天の網島」以後にも、「女殺油地獄」（享保六年）と「心中宵庚申」（享保七年）とを書いたが、就中本曲は巢林子晩年の渾熟せる作風を最もよく代表した傑作である事言ふを俟つまい。

「天の網島」の實説の詳細は知られないが、享保五年十月大阪天滿の紙屋治兵衛が曾根崎新地の遊女紀の國屋小春と、網島の大長寺の畔で情死した事實を脚色したものである。外題の意味は、情死の場所網島に、天網恢々疎而不漏の意を利かせ、痴情の結果天命盡きて網島に情死したと言ふ氣持で、「天の網島」と題したのである。

本曲の組織は近松世話物の定型に従つて、上中下三卷に分れる。梗概を言ふと、天満の紙屋治兵衛（二十八歳）は貞淑なる女房おさんと二人の子まであるに拘らず、三年來曾根崎新地の遊女紀の國屋小春（十九歳）と深く馴染んで、其結果は金に詰り、女は抱へ主に逢ふ瀬を堰かれるので、二人はかねて情死の約束をなし、互に其機會を待つてゐる。おさんはそのけはひを悟つて、憂慮に耐へず、小春に密かに文通し、治兵衛の命を救ふと思つて縁を切つてくれと懇願する。おさんの眞心に動かされた小春は、必ず其要求に添ふ旨を返事の手紙に約する。（以上は舞臺に現れる以前の出来事）。

治兵衛は斯くとも知らず、小春を心中に連れ出すべく、曾根崎の茶屋河庄方に行く。時は十月六日の夜の事である。おさんとの約束を重んじた小春は、心中を思ひとどまり、治兵衛と手を切り度いと言ふ意志を漏らすので、女の心變りを知つた治兵衛は、その變心がおさんの指し金によつたものとは露知らず、偏に小春が命を惜しんでの輕薄不實な心からと思ひ込み、憤怒の餘り之を刺殺せんとするが、折しも遊客に扮して來合せてゐた兄孫右衛門に押へられて強意見をされる。治兵衛は小春を散々に面罵し、絶縁を宣告して、兄に伴はれて歸る。（以上が上之卷、河庄の段）。